

濡れ恋



Presented by
Gunsmith AIYAMA

企画/原案：相山タツヤ
イラスト：ですこ

R18
ADULT ONLY
成人向け

main character

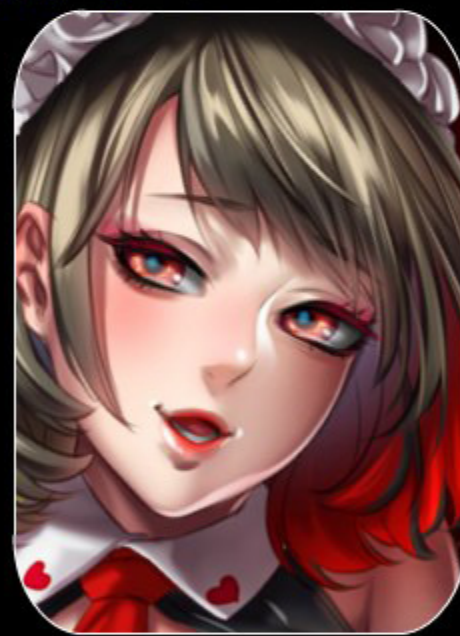
ツバキ

イジメを受けて不登校がちになっている薄幸な少女。

常に無感情を振舞って苦しみを打ち消していたが、初めて優しさを与えてくれた主人公との出逢いによって徐々に心を開き始める。



▼ガンズミス・アイヤマ過去作も配信中!▼



Other products by "Gunsmith Aiyama"



下校時間、雨が降り始めた。

天気予報通りだった。

「しんどい雨だな・・・」

ひとり校門を出た俺は、自分のビニール傘を開いた。

俺の横を、傘を持たない男子達が笑いながら駆け抜けていき、女子達も相合傘を楽しみながら仲良く帰っていく。

そんな輪の中に、俺が入る事は決してない。

俺は、いつだってボツチだ。

もちろん、こんな生活は寂しいとは思っている。
友達だって、彼女だって欲しい。

だが、それ以上に人と関わる事が怖い。
小学校の頃に酷いイジメに遭った記憶を引きずり続けている。

他人と取り留めのない会話をするだけでも、
相手に嫌に思われていないかといちいち怯えてしまう。

無理して他人と関わって気に病むよりも、
孤独に慣れ、道端の雑草のような存在になる方が楽だ。

だから俺はいつでも孤独を選び、他人に干渉しない。
これが自分を守るのに一番良い方法なのだ。



そう、思っていた。

彼女と出逢うまでは.....。

住宅街を歩いていたら時。

「何だよ、その目。早く死ねよ、ボケ！」

路地裏から、数人の女子の声が聞こえてきた。見ると、同じ学校の制服を着た三人組の女子が、黒いコートで羽織ったひとりの女子を取り囲んでいる。



「ほんと、いつ自殺してくれんの？ あんたの顔を見る度、イライラすんだわ。マジ迷惑料よこせよ」

「黙ってないで何か言えば？ 日本語わかんないのー？」

聞くに堪えない暴言を次々と浴びせられながらも、彼女は雨に濡れながら無表情で三人を見据え続けていた。





「お、おい！ お前ら、何してんだ！」

俺は衝動的に怒鳴り声を上げた。つい声が裏返ってしまった。このまま喧嘩に発展したらどうしようかと今さら思ったが、幸いにも、女子三人組は舌打ちだけして逃げていった。

「えっと・・・君、大丈夫？」

「誰……？」

彼女は雨に打たれながら、訝しげに俺を見据えた。その瞳は、フードを被っているせいでひどく陰気に見える。肌も不健康に蒼白く、いかにも病的な雰囲気漂っていた。しかし、あんな現場を目にした以上は放っておけない。





「ただの通りすがりだ。怪我は無い？」

彼女の鞆は、地面で踏まれて滅茶苦茶になっている。これは明らかにイジメだ。

彼女とは初対面で、詳しい事情も知らないが、まるで自分の事のように俺の中で激しい怒りが燃え上がった。



「あいつら……!」

逃げた女子達を追いかけようとしたが、彼女は俺の腕を掴む。

「……もういいよ。ボクに構わないで」

彼女は相変わらずの無表情だった。



「……放っておけるわけないだろ」

俺は握り拳を下ろし、代わりに彼女に傘を差し出した。

「え……？」

俺は強引に傘を渡し、彼女の汚れた荷物を拾い上げていく。

同じ学年で、殆ど不登校の女子が一人いると聞いたことがある。今まで会った事はなかったが、もしや彼女がそうなのか。

鞆からこぼれ出た教科書やノートには「死ね」「消えろ」等の悪口がびっしりと書き殴られていた。よく見ると鞆自体にも、カッターで切られた傷やジュースで汚されたような跡がある。

彼女が今までクラスメイトにどのような扱いを受けてきたか、説明されずともありありと分かった。

もしも今、あの女子三人組が目の前に居たら、俺は迷わず顔を殴っているだろう。それほど俺は強く憤っていた。





「……服と鞆を乾かした方が良い。俺の家、来ていいよ」
深く考えず親切心で言った所で、俺は自分の過ちに気付く。
出会ったばかりの男子が女子をいきなり家に誘うなんて、
あまりにもデリカシーがない。

「あ、いや、変な意味じゃなくて……!」

俺は必死に弁明しようとするが、挙動不審になるばかり。
もう最悪の展開だと思った、が。



「……わかった」

彼女はコクリと頷いて、じっと俺を見つめた。

相変わらず彼女の表情は乏しい。
けれども俺は、胸の高鳴りを抑えられなかった。

家までの道中、俺のビニール傘を二人一緒に使う事になった。肩が触れ合うほどの近さになってしまい、俺は心中穏やかではなかつたが、彼女はずっと無表情で付き従っている。

「えーと・・・君の名前は、何て言うんだ？」

「ツバキ」

苗字か名前か判然としないが、俺はうんうんと頷いた。

「ツバキさん、あの、傘狭くない？俺、出ようか？」

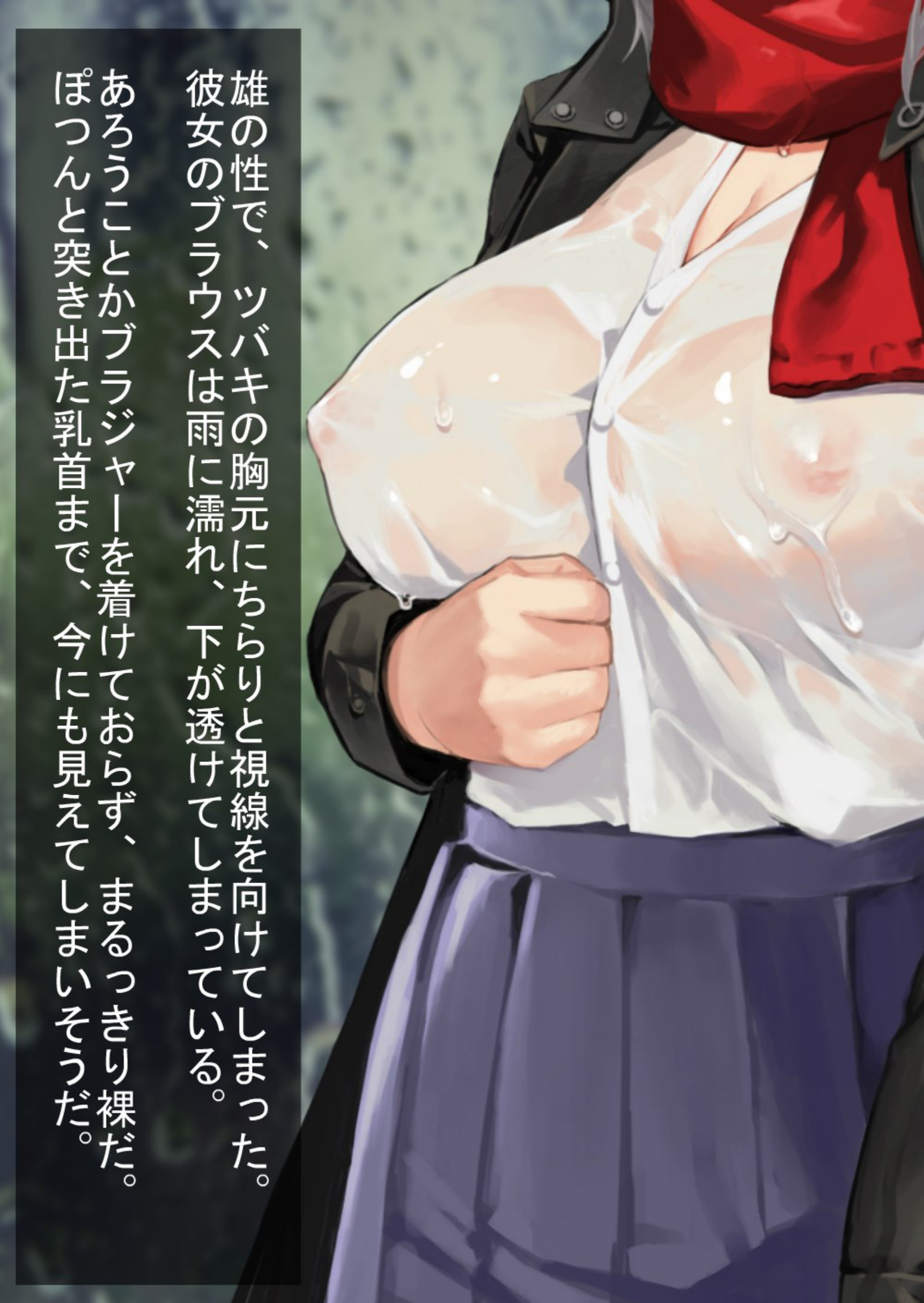
俺は別に濡れたって良いからさ」

「べつに狭くない。あと、『さん』付けしなくていい」

「わ、分かったよ・・・ツバキ」


何だか、どぎまぎしてしまふ。

状況が状況なので、色々に変な方向の想像がよぎっていく。



雄の性で、ツバキの胸元にちらりと視線を向けてしまった。
彼女のブラウスは雨に濡れ、下が透けてしまっている。

あろうことかブラジャーを着けておらず、まるっきり裸だ。
ぽつんと突き出た乳首まで、今にも見えてしまいきりそうだ。



コートで分かりにくかったが、クラスの誰よりも胸が大きい。彼女の歩みに合わせて、乳房が微かにふるふると震えている。

つい、俺は生唾を飲んだ。言わずもがな俺は童貞だ。同級生の裸体がこんなに近くにあった経験などない。

「……ブラジャー、盗まれたの。体育の着替えの時に」
「ひっ、あっ、えっ！ あっ、ご、ごめん！」

完全に視線の行き先を見透かされていた。
俺は首が軋むほどそっぽを向いて、何度も謝る。

「ボクの身体に興奮したの？ ほんとに、ヘンな人だね」
ツバキは気分を悪くした風でもなく、淡々とそう言った。

「ほ、本当に、ごめん……」

「もうこれ以上謝らないで。恥ずかしくなってくるから」

「あ……うん、分かった……ごめん……」

「……ボクの話、聞いてた？」



気付けば、マンションの自宅に到着していた。
俺の家は片親で、現在は仕事で長期出張している。
つまり今は完全に、俺とツバキの二人きりということだ。
男臭く散らかった俺の部屋に、女子が座っている。
あまりにも非日常すぎる展開に、思考が追いつかない。
俺は夢でも見ているのか。



「あ、コート、脱ぐ？ 掛けて「ようか」

「ううん。ボク、寒がりだから。このままで居てもいい？」

彼女が座っているのは、俺の布団の上。
雨で濡れっぱなしなので、彼女の痕跡が俺の布団にしっかりと
染み付きそうだと、妙に変態的な事を考えてしまう。



彼女はそれっきり、何も喋り出さなかった。
俺が健全な会話の切り出し方について色々悩んでいる間に、
沈黙がずいぶん長くなってしまった。
けれども、不思議と気まずさは感じなかった。
まるで二つの植物が寄り添い合っているように、
静けさが何だか心地よくなってくる。

「……やっぱり、退屈？」

彼女が少し不安そうな顔つきで尋ねた。

「いや、そんな事ない！俺も、こうして誰かと一緒に過ごすなんて久しぶりだから……何だか嬉しくて」

「……そんなこと言われたの、初めてだよ」



そう答えたツバキは、心なしか嬉しそうに見えた。

感情に乏しかった彼女が、俺に好意を向けてくれた。そう実感すると、俺の心の中に巣食う孤独感が融けていった。

彼女のことををもっと知りたい。そう思った。



「また今度あいつらにイジメられた時は、俺に言ってよ。
多分あいつら、男子相手には強気で来ないからさ……」

「……どうしてそこまで心配してくれるの？ 他人なのに」

「もう他人なんかじゃないよ。ツバキを放っておけない」

「なんで……?」



「それは……」

だんだん恥ずかしくなつて、その先は言い淀んでしまった。
ツバキは、ひたすら俺をじいつと見つめている。
答えてくれるまでも待つ。そんな雰囲気すら感じる。

「ツバキのことが……気に、なる、から、だよ……」



「それって……ボクが好きってこと……?」

ツバキは身体をずいっと近づけながら、聞き返してきた。

彼女の匂いがする。雨でぬるく湿った生々しい体臭。羽織ったコートの中に籠る汗の匂いが、むわっと漂ってくる。

同時に、ズキツ……と下腹部に鋭い衝動が過ぎた。



狭い密室に、男女が二人きり。

憐憫、好意、愛情・・・ツバキに向ける感情がそれらを一気に振り切って、膨らんでいく性衝動が抑えきれなくなってくる。

彼女が、ツバキが、今すぐ欲しい。

「ツバキ・・・!!」



「.....」
♡

俺は衝動的に、ツバキの豊満な胸を
ぎゅうっと鷲掴みにしてしまった。
水風船のように柔らかい。
手のひらを通して、トクントクンと
彼女の鼓動も伝わってくるようだ。



「んっ♡」

ツバキは全く抵抗しないどころか、
静かに甘い吐息を漏らし続けている。
俺は、そんな彼女を強く抱き寄せた。




「……」

「ちゅ……っ♡」


「はあ・・・ん、
ちゅ・・・っ♡」

俺は本能赴くまま、彼女の唇を貪った。
舌を差し出すと、ツバキも自ら舌を
ねっとり絡め合わせてくる。




「キスって、こんなに
エロかったんだな……」

「うん……ボクも、好き……♡
もっしょ……して……♡」



俺はツバキにキスを見舞いながら、
大きな乳房をゆっくりと揉みしだく。
ブラウスから濡れ透ける彼女の乳首は
興奮でぷっくりと膨れていた。
ツバキの愛欲も高まっているようだ。

「あっ……んっ♡
きもち、いいよ……♡」




「あ、あの、ツバキっ・・・
なんか順番、おかしいけど、
俺、ツバキが、好きだ・・・」

「わかってる、よ・・・♡
ボクが欲しいって、いっぱい♡
伝わってくるから・・・♡」



「ボクも……すき、だよ♡」



こんなの我慢できるわけがない。
俺は再びツバキをきつく抱き締めると、熱いキスをした。

「ちゅっ……♡
おちゅっ……♡」

「……キミって、童貞……?」

「……悪いか?」

「ううん……ボクも、はじめてだから……嬉しい」

「キミの「ジュ」、す「ジュ」くおっきくなってる」

「そっ、そ「ジュ」は……!!」

「遠慮しないで……ボクも、

えっちな「ジュ」といっぱいしたい……」

ツバキに求められ、俺はついに自分のペニスを取り出した。
恥ずかしさよりも興奮が勝り、俺のペニスはいつそう張り詰めて
固く勃起し上がっていく。



「すごい……こんなにおっきくなるんだ……」

初めて目の当たりにする男性器に、ツバキは嫌がるどころか興味津々な様子で顔を近づけてくる。彼女の生温かい吐息が裏筋にかかって、何ともくすぐったい。



「くろっ……っ♡」

「うあ……!!」

いきなり肉幹を舐められ、思わず俺は情けない声を上げてしまう。

「へろ．．．んちゅッ．．．♡ ボクの舌、きもちいい♡♡」

ツバキはペニスに舌を這わせながら、俺を見つめた。女子に、ツバキに、男性器を舐められている。その事実だけで、俺は今にも昇天してしまいそうな狂おしい快楽に襲われていた。



「おいぐへ、びくびくしてるね……舐められて、嬉しいんだ?」

「ふっふっ……ツバキの舌、すげえ……女子のフヒンっ、
こんなに気持ちいいのかよ……」
「そんなに良いんだ? もっど、してあげる……♡」



「あまじり.....♡」

「くちゅ、くちゅ.....♡」



「くほっ、んちゅ……♡」

「……………ッ……!!」
龟头を咥え込まれ、俺は悶絶する。
敏感な鈴口やカリ首を舐め回され、
制御不能な快楽に吞まれていく。

「ぢゅぢゅ、っ、ぢゅるっ
んっ、ぢゅっ、ぢゅっ♡」

ツバキの口の中で、俺のペニスが
熱い唾液と舌に激しく蹂躪された。
強烈な快楽の連続に、俺の意識は
どんどん白濁に塗り潰されていく。

「くづつ・んちゅつ
ぢゅつ・んちゅつ
ぢゅる・んちゅつ
♡」

ツバキは俺をさらに悶えさせようと、
どんどん口の動きを激しくしていく。
我慢汁が漏れる尿道をきつく吸い、
限界が近い俺を容赦なく責め立てる。



「.....」
「♡」

「.....」
「♡」

「んんっ……♡」

俺はツバキの口内に盛大に射精した。魂まで抜かれるような凄まじい奔流が突き抜けて、彼女の口に溢れ出す。人生で一番、長く激しい射精だった。

どしんっ
びゅるるる

「んっっ……ぐっくっ……
ちゅる、ちゅる……♡」

射精が収まっても、ツバキは夢中で俺のザーメンを吸い上げていた。尿道に残った雫まで飲み干され、俺はすっかり快樂漬け状態になる。

「ぶはあ……ちゅっ……
まだ、おっきいね……♡」

ツバキは、すっかり欲情した瞳で俺をじっと見つめてきた。ペニスも未だ固く張り詰めている。ツバキを抱きたい。彼女が欲しい。

「っ……っ」

俺がズボンを脱ぐと、彼女も無言でスカートを落とした。シヨーツまで脱ぎ去り、俺にゆっくり抱き付いてくる。ツバキもまた、俺を必死に求めているのだ。ペニスの先が、彼女の下部の陰毛に擦れ当たった。



「ボクが、キミの初めてでも、いいの……?」

「……ツバキこそ、俺が初めてで本当に良いのか?」

「うん……むしろ、キミじゃないと、いやなの……♡」

「おっ……♡」



濡れ恋

制作：ガンスミス・アイヤマ

企画・原案：相山タツヤ

[@musesakuya02S](#)

イラスト：ですこ

[@Desu_kitune](#)

本作品の著作権は相山タツヤが保有しております。
無断転載、複製、転用および
18歳未満の閲覧・購入を固く禁じます。

また、第三者が許可なく本作の内容やイラストを
アップロードする行為も禁止致します。
著作権を侵害する悪質な行為が発見された場合、
法的措置も視野に厳正に対処します。

Reproducing all or any part of the contents is
prohibited without the author's permission.

禁止私自転載、加工。

무단 전재는 금지입니다.

Copyright (c) 相山タツヤ All Rights Reserved.

